

市芦救援会通信

市芦救援会通信 〒659 芦屋市剣谷9 市芦分会気付け 0797(32)1131
臨時号 88/3 市芦救援会 発行人 玉本 格

強制配転内示者

深沢 忠 (理科)	教育研究所	指導員
長瀬 春代 (国語)	社会教育文化課	指導員

市芦定員内二五名切捨て・進学保障つぶし

つづく二名の強制配転を断固粉碎!

さて、すでに新聞報道等でご存じのとおり、芦屋市教委、市芦管理職は今年度の市芦入試において、定員内にもかかわらず二五名もの大量不合格者を出しました。憲法・教育基本法で保障された「すべての子供の教育権を保障する」という公教育の基本的責務を放棄した暴挙であり、断じて許すわけにはいきません。

昨年は一三四名の受験者に対し、なんと一クラスに相当する三三名もの定員内不合格者をだし、「新生市芦」として出発させながらも、一六名も留年・休学に追い込み、なんと昨年受験者の1/3もの生徒をきりすてているのです。「学力が低いのは生徒が悪い」「手のかかる生徒は学校から出ていけ」というのが、市教委・市芦管理職のすすめる「教育改革」なのです。これはまさに「教育破壊」と言うしかありません。

さらに、進学保障生六名のうち三名の障害児を切り捨てたことを許すわけにはいきません。そもそも進学保障とは、長く後期中等教育から排除され、高校の門戸を閉ざされてきた被差別の生徒の教育権を、教育行政の責任において保障していくことで取り組まれてきた筈です。

さらに三月二八日、深沢・長瀬両先生を市教委へ指導員(事務吏員)として配転した。共に、学校教育の中で切り捨てられようとする生徒の側に立った教育活動を推進し、この間の組合弾圧の中でも断固として、「生徒切り捨ての教育改革」と対決してきた。また、深沢先生は組合の委員長として組合を牽引し、長瀬先生は婦人部で婦人労働者のあり方を追求してこられ、しかも今回は病氣療養中にもかかわらず配転され、当局の組合つぶしの狙いは明白である。また、前田校長は市教委指導部長・井上は校長にと、生徒の生血を吸っての「昇任」は断じて許せない。

大幅定員割れの市芦屋

弱者切り捨てと

障害生の親抗議

3月20日 組



進学保障制度のなし崩しに抗議する父母、教師ら。市芦屋市剣谷、市立芦屋高校正門前で。

被差別部落出身者や障害生を別枠で受け入れる「進学保障」の見直しを含む大幅な教育改革に揺れる芦屋市剣谷の市立芦屋高校（前田和夫校長、定員百四十一人）では、受験生百三十三人のうち八人が合格、昨年に引き続き定員割れにもかかわらず「進学保障」に基づく受験生を含む多くの不合格者を出した。障害生の親たちで作る「市芦屋の進学保障制度を守る会」や市立芦屋高校教組（深沢忠委員長）などは「公教育にあるまじき弱者切り捨ての暴挙」と一斉に反発の度を強めている。

同教組によると中学校長からの「進学保障」具申書がついた受験生は六人で、このうち不合格となったのは三人で、情緒障害などいづれも障害をもつ生徒だった。

同校では、家庭環境や経済的な事情から進学を断念せざるを得なかった子どもたちの受け皿として四十六年度から「進学保障」をスタート。人権教育に力を入れながら四十九年度からは対象を障害生にも広げた。しかし、生徒の学力の低下や非行などの問題が取りざたされ、志願者の定員割れが続く中で、「正常化」を掲げる市教委の指導で改革を断行。昨年度は受験生百三十四人のうち、例年を大幅に上回る三十三人（うち進学保障受験生四人）を不合格としたうえ、複数担任制の廃止、能力別クラス編成の導入などに踏み切った。

この発表が張り出された午前十時、同実現する会と同教組約二十人は、同市公光町の市教育委員会前で約一時間半にわたって座り込み、さらに午後三時から市立山手、精道の両中学校の教師と合流し、市立芦屋高校に「不合格を出した理由と基準を明らかにせよ」と抗議した。同校の校長、教頭と市教委に姿を見せなかった。

同実現する会の世話人である永岡隆仁さんは「点数だけではなく、様々な角度から子どもを評価し、可能性を伸ばすのが公教育ではないのか。進学保障制度をなくすに理由を学校や教育委員会は明らかにしてほしい」と訴えている。



三月二〇日昼、定員内大量不合格に抗議し市教委前で座り込み

卒業式の次の日も

再び市民のみなさんに訴えます。

さる三月十一日、中学校の卒業式がありました。卒業証書を手にする子供たちにまじって、障書を持つ私たちの子供も緊張しながら堂々とその手に卒業証書を受け取りました。その後、クラスの仲間と肩を叩きながら、肩を抱き合い一緒に写真をとる子、涙を流しながら「ガンバルねんで」「市芦へ行こう」と励ましてくれる子、共に育ち合ってきた関係がここに確かにありました。「中学校ってええもんなやなあ」としみじみと思いました。

その前日、子供の弁当を作りながら妻がいました。「今日でもう弁当を作るのは最後やね」

かつて妻の口癖は「子供より一日後に死にたい」でした。九年間の義務教育の中で私たちが願ってきたのは、親が先に死んでも、仲間や地域の人々に支え合いながら生きていける関係でした。九年間の中でいろいろな関係が生まれるたびに、それを実感したものです。そんな思いを込めながら作ってきた弁当ももう作れません。

卒業式の翌日、子供が朝起きてきて最初にいった言葉が「がっこう」でした。右手には学生服を身につけていました。

今、教育委員会は私達の要求を「どっかつ」だといっています。障書を持つ子供と家族の「高校に行きたい」という思いを踏みむじめる教育委員会を私たちは許すことはできません。

親の気持ちを訴えることが「どっかつ」か？

去る三月七日、私たちは市立芦屋高校の校長に要望書をもって会いに行きました。

従来なら進学保障制度に基づいて中・高連絡会、特別具申書などで、親の思いや学校や家での子供の状況などくわしく話し合える場がありました。が、市教委は今年からそれらを一切認めようとしません。中学校側からも「今の状態では責任もった進路指導ができない」と、市教委に従来通りの方法を要求しましたが一切無視です。

私達は、このような事態の中で、やむにやまれず親や本人の声を直接聞いてもらおうと、市芦の校長に会いに行つたのです。

しかし、前田校長・井上教頭は「親とは一切会いません。帰って下さい」と、くりかえすばかりか、「これ以上しつこい警察を呼びます」といいます。始末です。そして最後には、入試を目前に控え、誠意を持って話し合ってほしいと願う私達の声を背に

しながらさっさと学校から逃げ去っていったのです。これを見ていた市芦の生徒たちも「ちゃんと言わせんと、学校を放り出して出ていくなんて」とあきれかえっていました。

そういう事実であるのに、松本教育長は九日の市議会中で「実現する会のメンバーが市芦に押し掛け、『無条件で入れよ』と、どっかつを続けている」とデッチ上げの発言を行いました。

私達の必死の訴えを「どっかつ」ととらえ、あたかも無理な要求をゴリ押ししてくる印象を与え、ことを意図した教育長発言は悪質です。進学保障制度の見直しを一方的に発表し、それに対する私達の不安や疑問に一切誠意を持ってこたえようとしない市教委の姿勢こそ問われるべきです。私達は直ちに抗議文を提出しました。また、このような教育委員会の間答無用のやり方は多くの市民の反発をかっていきます。マスコミも「不用意発言」と、批判しています。

「報あしや」のテーマ「私物を盗ますな」

市教委は、またもや「広報あしや」で、進学保障制度の本来の主旨を意図的に歪めて市民に流しています。

この制度の実施当初、市教委は「広報あしや」で次のようにいっています。

「心身障害を持った子供たちは制度的に入学資格を奪われています。こういった実態をふまえて、公立高校こそ、単に学力を基準として切り捨てるのではなく、これらの『進路を閉ざされた子供たち』に、定員の枠を『こえて保障すべきである』とふみだしたものが『進学保障』です」。

中学を卒業した瞬間から行く学校もなく、親と子のさしむかひの生活が始まる私たち家族にとって、この文章の一言一言が、どれほど生きる支えになつてきたか、はかりしれません。それが、今の「広報あしや」では、「公立高校入学者選抜要項に基づいて学校が編成した教育課程の履修が不可能であると判断された場合には合格できない」とにみえます。

三月二〇日の合格発表の日、私達はかすかな希望をもつて見にいきました。しかし、やっぱりジュン君とムー君の受験番号がありません。予想はしていたもののやはりショックです。その瞬間から在宅がはじまりました。

ムー君は、毎朝荒れます。今までは一番早起きで朝食をとって学校に行っていたのに、今は出かけるのは弟たちだけです。服は破るし、顔をたたき、つながりよつのない行き場を求めて荒れます。

親は、「今は春休みだから、そのあとは一緒に行く

き場をつくっていいこうね」と言いますが、本人は納得しません。ジュン君は、市芦高校へバスで行くのか歩いて行くのかを毎日のようにお母さんに聞いています。「どう説明したらいいのかわからへん」と母親は困っています。

- (1) 切られた障害児の在宅をどのように支えるのか。
- (2) 教育委員会との交渉をどのように持続させるのか。
- (3) 市芦高校との交流を具体的にどうするのか。

という、実現する会としての課題をもって頑張っていきたいと思えます

強制配転抗議行動で市教委を包囲 交渉の約束をかちとる

三月二九日市芦分会は、急を聞いてかけつけた高教組西阪神支部・県高支部・他労組・社会党・「実現する会」らと共に、また、心配してかけつけてきた市芦在校生が見守る中で、精道小学校前で抗議集会を開きました。深沢分会長の強制配転の不当性を強く訴える挨拶のあと、多くの支援団体の連帯の挨拶を受け、参加者約五〇名は市教委へ抗議・交渉申し入れにつめかけました。

教職員課をはじめとする「ともかく帰れ」という不誠実な対応と、管財課・私服まで要請しての退去攻撃を断固としてはねかえし、整然と抗議行動を続けました。

さらに、同じく不当配転をうけて抗議にきた芦教組の組合員とともに一〇〇名余で市教委を包囲し、抗議と交渉申し入れを続けました。

「芦教組とは会うが、市芦とは会わない」という卑劣な分断策動を大衆的な抗議ではねかえし、延々五時間を越える抗議の中で、三〇日の交渉を約束させることができました。私達の共同大衆行動の成果として確認しておきたいと思えます。今後も皆さんのご支援をお願いします。

※ 抗議はがき・抗議電話先

西宮市上大市 2-16-23	松本 壽男	☎ 0798-51-3875
神戸市東灘区本山中町 1-13-4	前田 和夫	☎ 078-431-1307
西宮市枝川町 11-76-102	井上 進	☎ 0798-48-8905